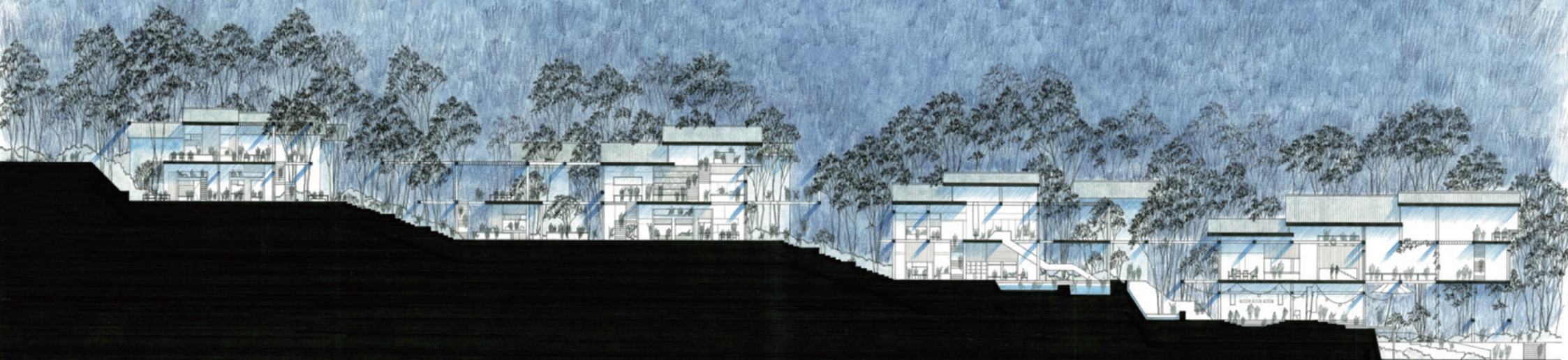


TOPOPHILIA

高知県佐川町における風土に根差した
生業や暮らしから人と自然の関係を築く学び舎



■ :TOPOPHILIA: DESIGN PROCESS

01. 計画の舞台 植生が多様で自然資源のあふれるまち | 高知県高岡郡佐川町

利便性と地理的特徴

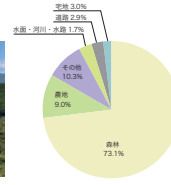
佐川町は高知県の中西部に位置し、豊かな森林と清流に囲まれた自然豊かな中山間地域である。虚空蔵山（標高674.7m）や勝森（544.8m）、桶峠森（769.2m）などの山に囲まれた中央盆地状の地形は、温暖多雨な気候である。冬はしばしば降雪も見られ、春や秋に霧が発生することもある。

また、世界的な植物学者・牧野富太郎博士の生誕地で、博士を尊んだ意匠でバラエティに富んだ自然と歴史情報がある古い町並み（上町地区）が観光資源である。



農村の風景

佐川町の民有林面積は7,382 haであり、町土面積の73%を森林が占める。森林資源の現状は、戦後宮々と続けられてきた造林の推進により、人工林面積が5,129ha、人工林率は69%となり、優良な人工林を形成している。



02. 計画の目的 里地里山に関わる担い手育成の場と環境学習体験としての場

佐川町に根ざした生業における若い世代の雇用の創出や、担い手の確保と育成を行うための場づくりを目的とする。地域にある自然資源や歴史資源、文化資源を有効活用した体験学習を行うための場でもある。担い手の育成や地域へ訪れた人々に地域の生業を体験する場をつくることは、地域の自然資源を活用することに繋がり、里地里山の文化を再考するきっかけとなる。そして、自然環境に密接した里山の暮らしと、向こう三軒両隣の関係を再生し、地域に住む人の暮らしを豊かにすることを目的とする。



担い手育成の場



環境学習体験の場

03. 計画の背景 自然と人間が共生する里地里山 | 輸入に依存しかつての里地里山文化が衰退した日本の中山間地域

里地里山の現状

里地里山は、日本国土の約4割を占める。しかし、昭和30年代以降の生活や農業の近代化に伴い二次林は手入れや利用されず、放置される箇所もみられるようになった。さらに、二次草原は大幅に減少し、昭和50年代頃からは耕作放棄地も増加している。



1920年 棚田がよく整備され、背後の山に植林が少なく、畑として利用されていた。
2002年 スギ・ヒノキ植林と竹林が広い面積を占めている。
高知県の仁淀川流域における中山間地域の景観の変化

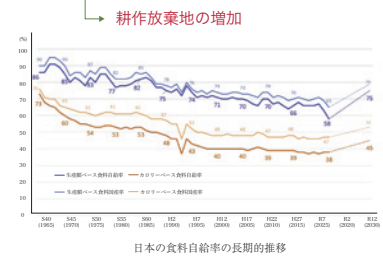
里山が衰退した原因

近年の日本は、産業構造とそれに伴う就業人口の変化、資源利用の変化と、人口減少や高齢化による地域の活力の低下、耕作放棄された農地の発生に伴い、里地里山の多様な自然環境の消失が懸念される。森林においても間伐等の森林整備が適切に行わないと、森林の機能が低下し荒廃する。また、戦後の貿易自由化によって海外の資源に依存したことにより、国内自給率が低下している。

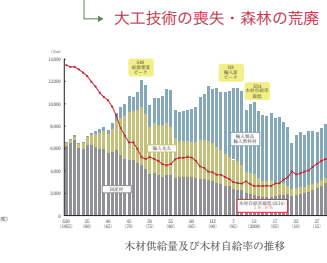
里山の衰退によっておこる影響

管理の担い手の活力の低下
里地里山の環境は、これまで農林業者などの地域の人が、農林業生産や生活の場として利用することにより維持されている。里地里山の多面的な価値は、利用を通じて創出、発見されてきた。しかし、里地里山の荒廃は、エネルギー革命や官農形態の変化など社会経済の変化に伴う森林や農地利用の低下や、人口の減少・高齢化の進行に伴う農林業者や集落の活力低下が主な要因となる。

食材 | 日本人の食文化の変化による国内自給率の低下

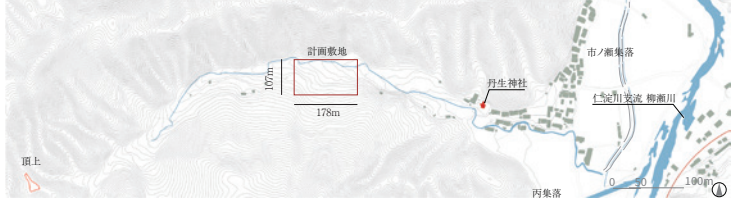


木材 | 工業化による国産木材の自給率の低下



05. 計画の敷地 里山風景の痕跡が残る谷戸 | 佐川町佐川地区市ノ瀬

計画敷地の特性



計画敷地の植生



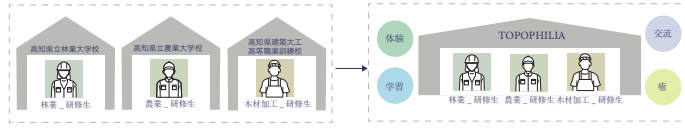
計画敷地は、市ノ瀬集落の一本道を奥に入った場所で自然と集落の間に位置する。この場所は天然林と人工林、河川、棚田、山菜等、地域資源の豊富な場所である。しかし、敷地調査を通して耕作放棄地や埋せられた姿に見えるスギが多く見られた。この場所の自然資源は十分に活用されていない。植生においては、建築の計画場所である北側斜面地にスギやヒノキの人工林が植林され、南側斜面にはシイ・カシ・タブノキといった広葉樹の天然林が自生している。

計画敷地周辺



06. 建築計画 自然環境に対して敬意を払う

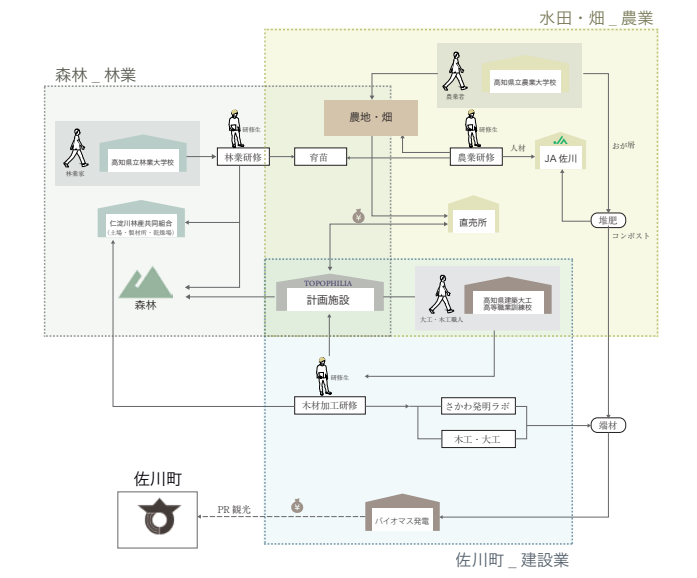
本計画は、高知県の既存の各研修施設の分校として位置付けを行う。配置計画では、林業・農業・木工の研修所を核に配置し、そこから、研修生の住まいや地域住民の交流の場を配置する。1階レベルには研修所を配置し、2階レベルには訪れた人が体験を行う場所や、人々が交流する場所を配置することで、体験者は敷地の高低差から生まれたずれによって視線が通り、研修生の活動の様子を見ることができるとしている。



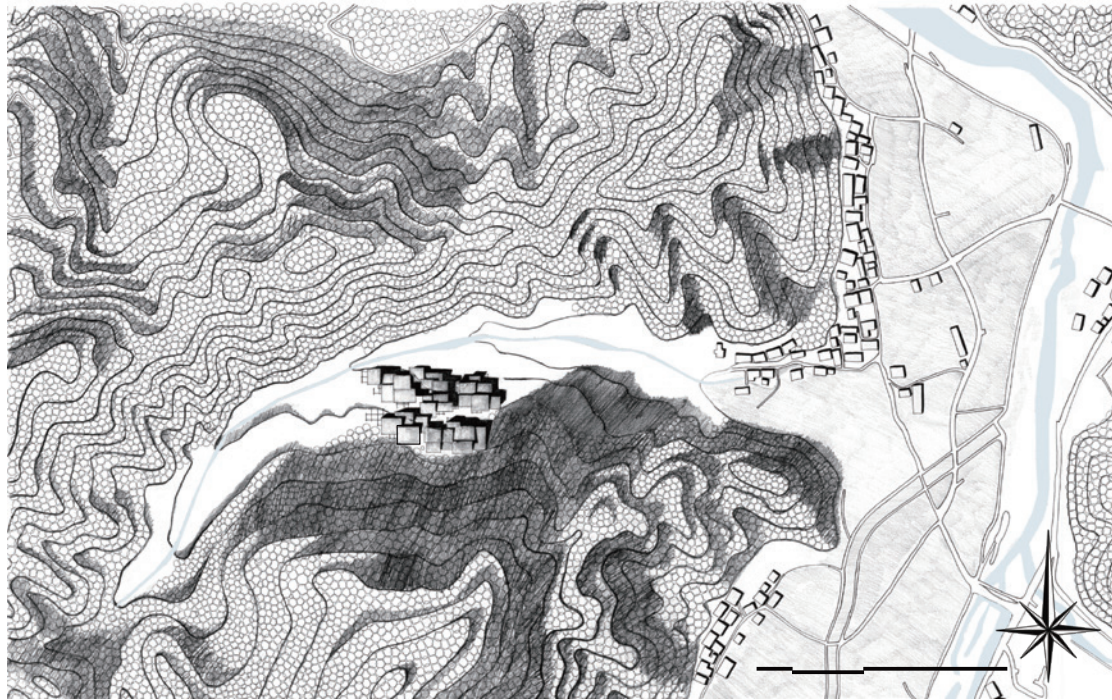
建築のアプローチ

- 透明度の高い屋根と壁：透明度の高いガラス
建物内に自然光を十分に取込むことができ、室内の明るさや開放感を確保する。周辺の風景に溶け込み、季節の変化によって建物の表情が変わる。
- 透明度の低い屋根と壁：漆喰壁や土壁等、透明度の低い材料
建物内外の光が均等に広がり、室内の視線が通ることができ、
- 半透明の屋根と壁：ガラスやポリカーボネート、障子等
建物内部の一部が目隠しとなり、プライバシーや照明の調整が可能となる。また、建物外部からの視線を遮る役割も果たす。
- 視線の抜けや土地の性質に考慮した床
土地の性質や植生、日照、湿度等の環境要因を考慮して床を配置する。
- 地域の発展や変化に対して柔軟に対応するフレーム
初期の建築段階で拡張可能なフレーム構造を採用する。これにより、地域の需要や利用状況に応じて、規模や用途を調整できる。自然に対して6m×6m×4mのフレームを設け、地面との接面積を最小限に抑える。フレームは、地域の発展や変化に対して柔軟に対応し規模や用途を調整する。さらに、地域の未利用大径材や間伐材を活用することから、森林の循環に寄与する。

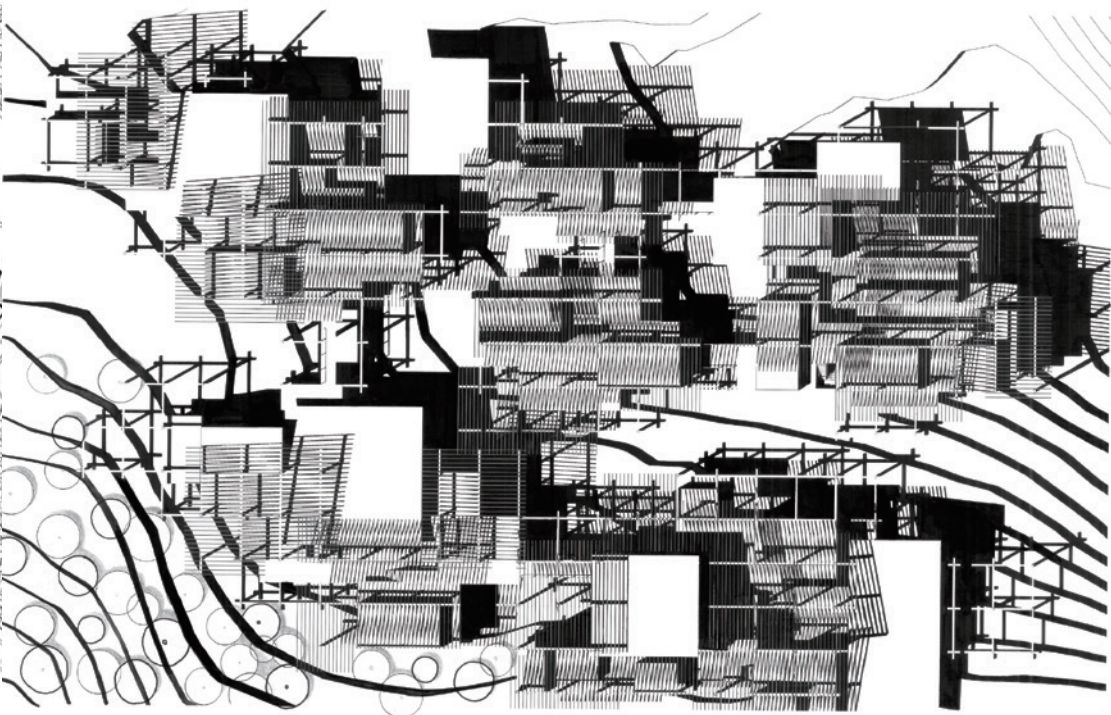
07. 研修生の相互関係図 教育機関、民間企業、行政と連携した仕組み



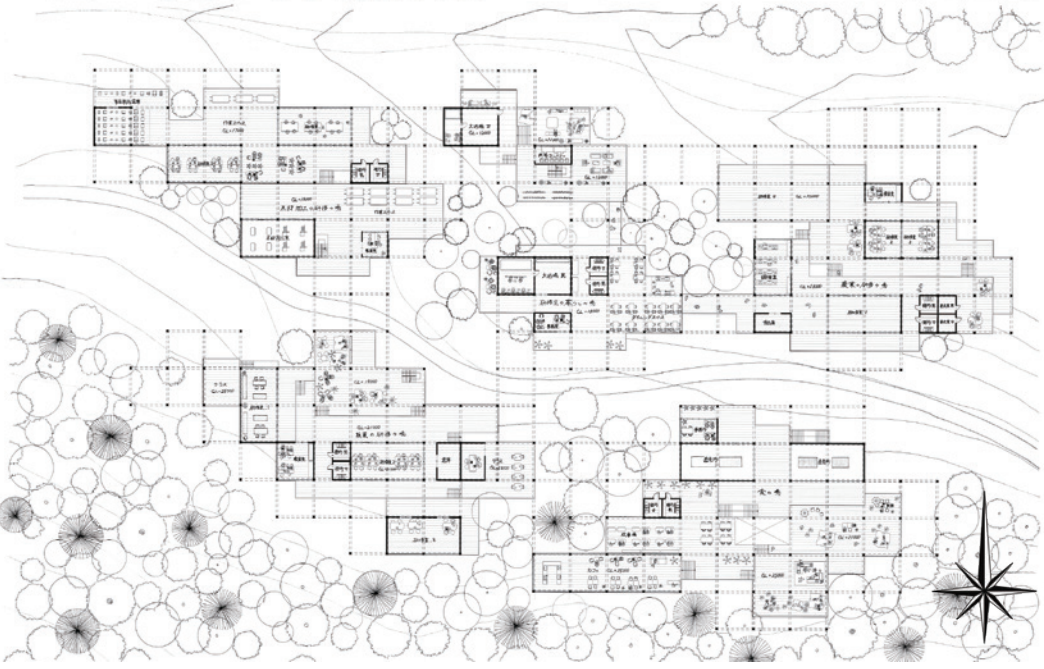
■ :TOPOPHILIA: ROOF PLAN



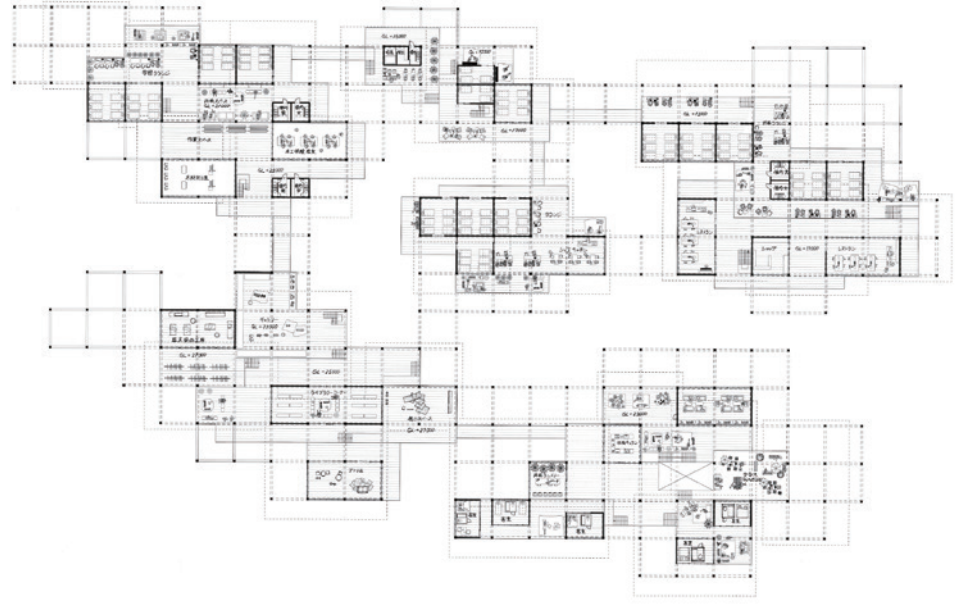
■ :TOPOPHILIA: ROOF PLAN



■ :TOPOPHILIA: FIRST LAYER PLAN



■ :TOPOPHILIA: SECOND LAYER PLAN



■ :TOPOPHILIA: SECTION-1

■ :TOPOPHILIA: SECTION-2

